

大辻清司《物体A》1949年 千葉市美術館蔵

C'n
scene
news

千葉市美術館ニュース 「C'n」(シーン) 107号

vol. 107

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

ccma_jp ccma_jp

[編集・発行] 千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区
中央3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba
260-0013, Japan <https://www.ccma-net.jp/>
[発行日] 2023年3月27日
[印刷] 株式会社 エイチケイ グラフィックス

館長のつれづれコレクション案内

イメージと物質の関係を問う高松次郎の「写真の写真」



高松次郎 「写真の写真」

ゼラチン・シルバー・プリント
1973年 52.5×40.6cm
千葉市美術館蔵
©The Estate of Jiro
Takamatsu, Courtesy of
Yumiko Chiba Associates

この作品は、紙焼き写真のある情景を撮影した紙焼き写真ですが、被写体となっている写真の光沢のある表面の一部が光を強く反射して、そこに写っているはずの像が明確に認識できないようになっています。「写真の写真」シリー

ズのどの作品も同様に撮影されており、その点に作者の狙いがあったことがわかります。当時の写真は、ネガフィルムから印画紙に像を焼き付け、現像液に浸したのちに水で洗浄するもので、乾燥の過程で印画紙が湾曲したり、反っ

たりするのが普通でした。この作品の表面も被写体となっている写真のように湾曲しているはずなのに、私たちは写真の置かれた板の木目のリアルな質感に目を奪われて、イメージを伝えている紙の表面の様子には意識が向きません。撮影された視覚世界に引き入れられていると見えてこない印画紙の物質性を、この作品によって高松は露呈させるとともに、人は写真を見る際、無意識に被写体の像のみに意識を集中してしまうことにも意識喚起しています。

絵を見る時でも人はその絵の作り出す視覚世界に容易に誘導されて、それが紙やカンヴァスに絵具が付着した物質であることを忘れがちですが、写真の場合はなおさらです。素材の物質感が絵などよりも希薄なためでしょうか。撮影された視覚世界に引き込みつつ、その媒体となっているものもまた平滑でない紙なのだ伝える「写真の写真」は、見る者の意識にある種の衝撃を与えます。

カンヴァスに人や物の影のみを描き、実世界にあるはずの影の主の不在を突き付けた「影」のシリーズ(1964-66年)、一点消失遠近法で描かれた家具のように見える立体物を構成してイメージと物質との関係の再考を促した「遠近法」のシリーズ(1967-68年)など

で知られる高松は、「人間がものを見るということを見ること。そして、人間がものを見ることの限界について観察すること」(1967年8月5日のメモ)と記しているように、一貫して、視覚と認識のあり方を問い続けました。

「写真の写真」が制作された1972年頃は、「この原稿をゼロックスすること、次に、ゼロックスされたコピーを原稿にしてゼロックスすること、それ以後、順次あらたにゼロックスされたコピーを原稿にして、できる限り多くコピーしていくこと」という手書き文字の記された「この原稿をゼロックスすること」(ゼロックスコピー・紙、作品下にJIRO TAKAMATSUのサイン、1972年頃、36.4×25.7cm)というコピー紙の作品も制作しており、ゼロックス機械の普及によって日常的になりつつあった複製というものの成り立ちと視覚の関係にも興味を持っていたようです。

身近な視覚の装置と人の関係を問う高松の作品は、意表を突いて通念を揺るがします。そして、鏡に映る鏡のように、どこまでも入れ子状に連鎖するイメージと物質の関係をどのようにとらえるか、また、イメージや物質と人はどのような関係を築けるかを見る者に問うてきます。

[館長 山梨絵美子]

「前衛」写真の精神： なんでもないものの変容

瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄

担当学芸員インタビュー

千葉市美術館ではひさしぶりの写真展を開催します。当館のコレクションも活用する本展では、瀧口修造(1903-79)、阿部展也(1913-71)、大辻清司(1923-2001)、牛腸茂雄(1946-83)という4人の作家を取り上げ、新たな視点から「前衛」写真をたどります。展覧会の概要や見どころを、担当学芸員に聞きました。

〔話し手：学芸員 庄子真汀、聞き手：広報 磯野愛〕

——非常にひさしぶりの写真展ですね。まずは開催の経緯をお聞かせください。

千葉市美術館は、じつはけっこうな数の写真のコレクションを持っています。2019年からここで勤務することになり、はじめて所蔵品の全貌を知ったときは、こんなにたくさんあるんだ、と素直に驚きました。けれど、これまで「写真展」というかたちではほとんど紹介されてきませんでした。

——そもそも写真展が少なかったですし、開催したものも他館から借用した作品で構成されていましたからね。

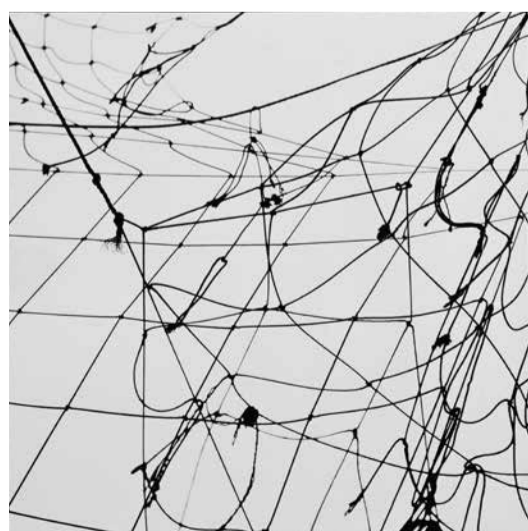
そうですね。なので、機会があれば紹介したいとずっと考えていました。そのタイミングで、瀧口修造、阿部展也、大辻清司、牛腸茂雄という4人の作家を取り上げる展覧会の企画が持ち上がり、当館のコレクションと親和性のある作家たちだったので、ぜひ参加したいと思い開催することとなりました。牛腸はありませんが、ほかの3人は当館に所蔵品があるんです。

——今回、なぜこの4人の作家を取り上げるようになったのでしょうか。

彼らが実際に交流を持っていたり、師弟関係にあったりしたことが一番の理由です。瀧口を始点にして、つなぎあわせることができる4人。くわえて、2023年は4人の節目が重なる年でもあります。瀧口は生誕120年、阿部は生誕110年、大辻は生誕100年、牛腸は没後40年で、これもひとつの後押しになりました。

——具体的に4人はどのような関係にあったのでしょうか。

まず、瀧口と阿部は、詩画集『妖精の距離』【画像1】を共作したり、写真研究グループ「前衛写真協会」の立ち上げメンバーとなったり、同世代の作家として密接な関係を持っていました。『妖精の距離』は、瀧口が詩を、阿部が挿画を手がけ、阿部の活躍のきっかけにもなっています。また、阿部は画家として知られていますが、とくに戦前、写真や写真批評も数多く発表していました。当時の前衛写真の動向を牽引したふたりだと言えます。



【画像3】牛腸茂雄《桑沢デザイン研究所課題「空」》1966年

——そこに大辻が加わってくるんですね。

「前衛写真協会」の活動の場であったのが、『フォトタイムス』という写真雑誌でした。この『フォトタイムス』をきっかけに写真家を志したのが、大辻です。大辻は、10代のころ、古本屋で読んだ『フォトタイムス』に衝撃を受けます。手に取ったのは、まさに瀧口や阿部が誌面で活躍していた時期の号でした。その後、写真家となった大辻は、実際に瀧口や阿部と交流を持つようになります。大辻のギャラリーでの初展示を瀧口がキュレーションしたり、阿部が演出した被写体を大辻が撮影したりと【画像2】、こちらも創作の面で交流を持ちました。

——当時、瀧口の存在はとても大きかったですよね。彼を中心にした関係性があったのだらうと思います。牛腸はいかがでしょう。

牛腸になると一気に時代が新しくなるので、違和感を覚える方もいらっしゃるかもしれませんが、牛腸はなによりも大辻の愛弟子でした。デザインを学ぶために入学した桑沢デザイン研究所で、教員であった大辻に写真の才能を見初められ【画像3】、牛腸は写真家の道を歩み始めます。その後も、大辻は、牛腸の写真集に序文を寄せるなど、生涯にわたってよき理解者であり続けました。

——展覧会では、4人をどのように紹介するのですか。

やはり、関係性に限った話だけでは展覧会としてのおもしろみに欠けるので、今回はさらに深掘りして、作品においてもつながりを見出せないかと考え、



【画像1】画：阿部展也(展也)、詩：瀧口修造《『妖精の距離』より「蝸牛の劇場」》1937年 新潟市美術館蔵

ひとつのテーマを据えました。それが、展示のタイトルにある「なんでもないものの変容」です。

——「なんでもないもの」が、今回の軸でありながら、また伝えるのがなかなか難しいところでもありますよね。

いわゆる「前衛写真」と聞いたときに想起されるイメージは、造形的で技巧的で、コラージュやフォトグラムの技法を使うなど、演出された非日常的な作品かと思います。一方で、瀧口は、そのような技巧に頼った前衛写真の在り方に、早々から警鐘を鳴らしていました。写真におけるシュルレアリスムとは、「超現実主義とは日常現実の深い裏のかけに潜んでいる美を見出すこと」と語り、日常的な風景のなかにも前衛を見出せると述べているんですね。

——大辻も、初期は造形的な写真を手がけていますが、1970年代にはスナップ写真も撮影しています。

「なんでもないものの変容」というタイトルは、1975年に大辻が『アサヒカメラ』で連載していた「大辻清司実験室」第5回のテーマ「なんでもない写真」からきています。この回では、「オートマチスム的な手法を積極的に採用する」という意図のもと、周囲の風景を撮影しています。シュルレアリスムで用いられるオートマチスム(自動筆記)を取り入れて生まれた作品は、一見じつにとりともない写真に見えます。しかし、よく見てみると、構図や被写体になにかしらの共通点や作家性が浮かび上がってくるように感じます。



【画像2】大辻清司《美術家の肖像》1950年 千葉市美術館蔵

——そういった視点が、牛腸のスナップ写真にも息づいているわけですね。

そうですね。そのような「なんでもないもの」が、4人の作家で受け継がれ、変容していったことが、展覧会を通して伝わるといいなと思っています【画像4】。

——いまは、スマートフォンやデジタルカメラで、だれでも簡単に写真が撮れる時代になっています。今回の展覧会は、そのような現代の写真との接点はあるのでしょうか。

絵画や彫刻とは違って写真は身近なメディアですし、ご覧になる方々のなかにも写真を撮る方がたくさんいると思いますので、自分自身に引きつけて考えることはじゅうぶんにできると思います。どんな写真であれ、写真を撮るときは「こういう写真が撮りたい」という動機や意思が働いていると考えていて。その背景には、少なからず「前衛」的な視点があるのではないかと、わたしは思っています。

——当時も身の回りの風景を撮影していたわけですから、状況は同じですね。街灯とか、手すりとか、街並みとか……。展覧会を見て、美術館を出たら、街の見え方が変わってきそうですね。

そうですね。戦前から戦後の作品をあつかう内容ではありますが、みなさんの写真に対する意志みたいなものが、展覧会を見ることで意識にのぼってくるとうれしいなと思っています。ふだん写真を撮らない方も、撮ってみたいくなるんじゃないでしょうか。



【画像4】牛腸茂雄《見慣れた街の中で 30》1978~80年 新潟市美術館蔵

「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容
瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄

会期 2023年4月8日【土】～5月21日【日】
前期：4月8日【土】～4月30日【日】
後期：5月2日【火】～5月21日【日】

会場 8・7階 企画展示室
休室日 4月17日【月】、5月1日【月】

詳細はホームページよりご覧ください





2023年1月14日(土)～4月2日(日)「つくりかけラボ10 原倫太郎+原游|RE 幼年期ディスカバリー」

レポート 遊んで、遊んで、また遊んで！ 日々生まれる新しい遊び

原倫太郎さんと原游さんによる「RE 幼年期ディスカバリー」では、おふたりの滞在制作を通して、会場にたくさんの新しい遊びが生まれ続けました。ここでは、会期中に生まれた遊び、そしてその作品の数々をご紹介します。



会場の中央を流れる水の村。ウォーターヴィレッジの街並みや住民をワークショップで製作し、にぎやかな村に。会場の素材で船を作って流すこともできます！



雑誌やチラシから言葉を選んで切り抜き、おもしろい組み合わせをつくってみる遊び。スクラップブックには、おもしろく笑ってしまう「リミックスワード」がたくさん。

リミックスワードスゴロク



「リミックスワードをつくろう！」で生まれた言葉をマスにしたスゴロク。マス目は会場の外にまで飛び出し、指令に必要なアイテムもしっかり完備。

秘密基地をつくろう！



会場にある大きな木の箱のなかに秘密基地をつくりたい人を、なんと公募！たくさんのアイデアが集まり、それぞれ個性的な秘密基地が誕生しました。



ひつつき虫ツリーをつくろう！



好きな紙を組み合わせ、ねり消しゴム状の粘着剤で木にくっつける遊び。ただの紙の切れ端が、組みあわせると虫に見えたりお花に見えたり。

つくりかけラボ10
原倫太郎+原游 |
RE 幼年期ディスカバリー
会期 2023年1月14日[土]～4月2日[日]
会場 4階 子どもアトリエ
観覧料 無料



次回予告 /



2023年4月17日(月)～7月2日(日)「つくりかけラボ11 金田実生|線の王国」

「線」を主役にしたプロジェクト！ アーティストインタビュー

[取材日:2023年3月1日]

第11弾の「つくりかけラボ」は、画家の金田実生さんをお招きします。金田さんは、油彩、ドローイング、版画など、一貫して平面作品を手がけ、高い評価を受けています。子どもアトリエという広い空間で、どのようなプロジェクトが展開されるのでしょうか。インタビューを行いました。

—「つくりかけラボ」というプロジェクトをはじめたとき、率直にどのように感じましたか。

はじめは「滞在制作をする場」という認識を持っていて、作家が制作しているようすを来場者の方が見るのだと思っていました。しかし、実際におじゃましてみると、作家だけではなくみんなで作り上げていく参加型の側面が大きいことがわかり、とても新鮮な印象を受けました。

—金田さんのプロジェクトは、どのような内容になりそうですか。

いい意味で成り行き任せなところがありますね。それが「つくりかけラボ」のおもしろいところだと思うので、びっちり計画は立てていません。そのなかで、「線」を主役にしたプロジェクトを考えています。線と聞くと、一般的には硬いシャープペンシルの線のようなものが思い浮かぶかもしれませんが、ほかに多い

いろいろな線があります。直線、自由曲線、力強い線や太い線。そういう線の多様な表情がおもしろいように、「線の王国」というタイトルで、いろいろな線を描いていきたいと思っています。

—「線」というアイデアはどこからきたのでしょうか。

線を描くワークショップをやると、「意外とおもしろい」と言っていたことがあるんです。線には多様なバリエーションがあることに、みなさん意外性を感じ、絵の世界が広がっていくようなんですね。あえて線だけを取り上げるのは緊張感もありますが、「こんなこともできるんだ」と可能性に気づいてもらえるのではないかと思います。線だけをフィーチャーしてやってみようと思いました。

—来場者は、このプロジェクトにどのようにしてかわれるのですか。

「線の王国」というタイトルにない、王様がいる設定にし、王様から毎週指令が出るという内容を考えています。たとえば「立って自分の手が届く範囲だけで描いてみよう」とか、「寝転がって描いてみよう」とか。身体的に描いたり、あとは感覚や感情をもとに描いたり、指令を通じて線を増やしていくかなと思っています。

—会期中には、浮世絵を取り上げたアーティストワークショップもありますね。なぜ浮世絵をテーマに選ばれたのでしょうか。

千葉市美術館では浮世絵のコレクションを非常に多く持たれています。そこで、「昔の線」と「今の線」をコラボレーションさせ、新しい絵ができた

らおもしろいなと思いました。千葉市美術館の浮世絵データベースを見ていると、浮世絵の線って古い感じがなくて、おもしろいんですね。具体的に見えるけれど、たとえば雨や風を表す線はとても抽象的で、想像力をかきたてます。それを使わない手はないということで、担当学芸員の田辺さんとともにセレクトした浮世絵の線の版を起こしてもらい、そこに参加者の方々の線を描き加えるかたちで、新しい作品をつくるワークショップを企画しました。

—最後に、金田さんご自身が「つくりかけラボ」でいちばん楽しみにしていることはなんですか。

「どうなるかわからない」ということが、美術の表現にはつねにあると思います。わたし自身、最終的に何ができてくるかわからないまま制作することがあります。そういう過程が、スペースを広げさらに大きくなったとき、どのようになるのか本当に楽しみです。「整理されていないおもしろみ」をすぐ期待していますね。



金田実生《ドローイングノート8》2018年



金田実生《泥と水》2018年



金田実生《結び目をほくく》2018年

つくりかけラボ11
金田実生 | 線の王国

会期 2023年4月17日[月]～7月2日[日]
会場 4階 子どもアトリエ
観覧料 無料



友の会会員限定イベント ちばしばコレクション散歩 無縁寺心澄の描いた千葉

開催日時 2023年3月4日[土] 10:30-12:30

当日の行程 10:40 千葉市美術館（旧川崎銀行千葉支店）出発→都川→千葉県庁・千葉県警察署周辺→千葉県立図書館→千葉県立千葉中学校・高等学校→12:10 亥鼻公園 解散



都川沿いを歩く参加者たち



県庁、羽衣公園にて解説に耳をかたむける



千葉県立中央図書館前にて小休憩



増田材木店前 描かれた風景と現在のようすを見比べる



無縁寺心澄《千葉中講堂》昭和6年(1931)頃 千葉市美術館蔵



千葉県立千葉中学校・高等学校の講堂 作品の画像から描かれた位置を探す



亥鼻公園 千葉市立郷土博物館前で解散

当日は快晴で、穏やかな天候に恵まれました。現在、1階のさや堂ホールとなっている旧川崎銀行千葉支店から始まり、都川、千葉県庁周辺、千葉県立千葉中学校・高等学校（旧制千葉中学校）、そして亥鼻公園まで、講師の田辺昌子副館長の解説を挟みながら1時間半ほど歩きました。

参加者の皆さまは解説に熱心に耳を傾けたり、作品と同じ画角で写真を撮ったり、参加者同士で会話をされるなど、楽しんでいただけよう様子です。

当会会員の皆さま向けのイベントも、コロナ禍で2年ほど中止を余儀なくされてきました。「ちばしばコレクション散歩」は、3密を避けながら会員の皆さまに当館が所蔵する作品に親しんでいただく方法はないかと、今年度当初から計画してきたイベントの一つです。

当館友の会の愛称である「ちばしばフレンズ」の名のとおり、千葉市美術館にもっと親しんでいただくきっかけになるようなイベントを、これからも企画・開催していきます。美術館ホームページで随時お知らせしますので、ご興味のある方はぜひご入会・ご参加ください！

[テキスト：友の会担当 佐藤仁美]

友の会のご案内

皆さまに千葉市美術館をもっと身近に感じて楽しんでいただくため、今回開催した「ちばしばコレクション散歩」や、学芸員によるギャラリートーク、スライドレクチャーなどの会員限定イベントをはじめ、各種サービスを提供しております。

■ちばしばフレンズ■

入会金1,000円+年会費2,000円

どなたでもご入会いただける1年間の会員プログラムです。企画展・常設展が無料で何度でもお楽しみいただけるほか、当館の企画展情報などのお知らせや提携する美術館・博物館での割引が受けられます。

■ちばしばフレンズ・ライト■

入会金500円+年会費1,000円

39歳までの方を対象にした1年間の会員プログラムです。常設展はいつでも無料、企画展はお好きなものを年間2回までお楽しみいただけます。



友の会会員証 (絵柄は変更する場合があります)

詳しくは千葉市美術館ホームページまたは友の会のご案内パンフレットをご確認ください。パンフレットは館内各所で配布しています。



当日の資料



松井天山「千葉市街鳥瞰図」(昭和2年5月写生)から一部を抜粋した地図

このイベントのコースにゆかりのある無縁寺の作品を紹介する冊子

2023 年度展覧会スケジュール

	2023.4	5	6	7	8	9	10	11	12	2024.1	2	3
企画展	「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄 4月8日[土]—5月21日[日]		三沢厚彦 ANIMALS/Multi-dimensions 6月10日[土]—9月10日[日]			new born 荒井良二 いつも知らないところへ たびするきぶんだった 10月4日[水]—12月17日[日]			サムライ、浮世絵師になる！ 鳥文齋栄之展(仮称) 2024年1月6日[土]—3月3日[日]		第55回 千葉市民美術展覧会 3月9日[土]—29日[金]	
	実験工房の造形 4月8日[土]—5月21日[日]											
常設展	千葉市美術館コレクション選 ※近世・近代美術は1ヶ月おき、現代美術は3ヶ月おきに展示替えを行います。											
つくりかけラボ	つくりかけラボ11 金田実生 線の王国 4月17日[月]—7月2日[日]			つくりかけラボ12 三沢厚彦 コネクションズ 空洞をうめる 7月14日[金]—10月15日[日]			つくりかけラボ13 黒田菜月 鳥の名前を届ける(仮称) 10月28日[土]—2024年1月28日[日]			つくりかけラボ14 荒井恵子 2月14日[水]—5月(予定)		